

た・づ・な

「軽種馬流通促進を目指して」

日本中央競馬会
馬事部
生産育成対策室 室長

山野辺 啓



まず始めに、2000年と2010年（一部2009年）の10年間における頭数の変化を示しますので、何の数字かを想像してみてください。7,968頭 6,882頭、8,624頭 7,464頭、12頭 32頭、1,339頭 1,564頭、125頭 168頭。

は新規に中央あるいは地方競馬に競走馬登録された頭数で、10年間で1,086頭減少しています。内訳を見ると、中央は4,194頭から4,573頭と379頭増加しているのに対して、地方は3,774頭から2,309頭と1,465頭という大きな減少がみられます。このように地方競馬の衰退を主要因として、国内の競走馬需要は大きく減少していることがわかります。

はサラブレッドの生産頭数で、10年間で1,140頭減少しています。生産頭数は競走馬登録頭数とほぼ平行して減少を続けています。国内需要の増加が見込めない現状において、生産規模を確保するためには、新たな販路を開拓することが喫緊の課題となっています。

は競走用として海外に輸出された頭数です（競走のための一時輸出は除く）。近年の日本産馬の海外での活躍やパート 国への昇格という追い風にもかかわらず、10年間でわずか20頭の増加に留まっています。特に有望と思われる東南アジアへの輸出についても、1頭から23頭と22頭の増加にすぎません。国内需要の大幅な減少と比べて、輸出規模の拡大は微々たるものにすぎないことがわかります。

そのような状況の中、昨年度「海外流通促進委員会」が開催され、今後取り組むべき方向性が打ち出されました。その中で、当面のメインターゲットとしては、競馬賞金、出走経験馬の出走や日本人の馬主資格取得等の条件および近年輸入頭数を300頭から倍増し、競馬規模を拡大しているシンガポールが有力と考えられます。シンガポール競馬でいかに効果的に日本産馬の優秀性をアピールできるかが、販路拡大へのキーポイントになると思います。

また、近年急激な成長を遂げている中国は、馬の輸入頭数も2005年の300頭から2009年には1,300頭と大幅に規模を拡大しています。輸入先はオセアニアや米国が中心ですが、日本からも昨年3月に51頭、10月に30頭が輸出され、オータムセールではご存知のとおり、日本のセリ市場で初めて18頭が購買されました。現状では政府公認競馬は再開されておらず、商習慣も欧米とは異なりますが、潜在的には世界最大規模のマーケットになる可能性を秘めています。現在は、主に競馬国際交流協会が中国との窓口として対応していますが、公的機関と民間の役割分担を明確化したうえで、オールジャパンで将来を見据えた体制の整備を進めていくことが急務であると思います。

は当歳、1歳、2歳市場の総取引頭数です。10年間で225頭増加しており、購買者のニーズは庭先から市場に移行しつつあることがわかります。そのような状況の中、昨年度「国際水準のセリ

市場のあり方検討会」が開催され、海外の主要なセリ市場の規程や運営を参考として、増加されることが予想される海外からの購買者に対応した購買者登録方法等、わが国の目指すべき国際水準のセリ市場の方向性が打ち出されました。市場売却率が増加している今こそ、欧米のセリ市場に比肩する高い売却率を目指し、欠場馬対策、主取手数料や市場サービス等の市場改革を実施する絶好のチャンスといえます。

は繁殖牝馬セール取引頭数で、10年間で43頭増加していますが、年間165頭にすぎず、大半は生産牧場からの販売申込です。1歳市場における牝馬の取引価格や頭数は、牡馬のわずか60%に留まっています。その一つの要因として、牝馬の取引価格が競走のみの評価で判断され、繁殖牝馬としての価値が反映されていないことがあげられます。馬主に繁殖牝馬セールを周知し、引退後の牝馬の売買を促進することが、牝馬の価値向上につながるのではないのでしょうか。

以上、わが国の軽種馬流通を取り巻く現状について簡単に紹介しました。決して楽観できる状況ではありませんが、日本産馬の資質向上を背景として、セリ主催者や生産者等が各々の立場から、さらなる流通促進に向けて早急に取り組んでいくことが大切であると思います。